# 浜比嘉島の遺跡

#### 金 武 正 紀 (沖縄県立博物館)

Notes on the Archelogical Sites of Hamahiga Island, the Okinawa Islands

> Seiki KIN (Okinawa Prefectural Museum)

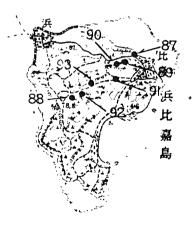
はじめに

研究史と遺跡概説

沖縄県立博物館の浜比嘉島総合調査の一 1 多和田真淳氏の調査 環として、1989年8月30日~9月1日まで 浜比嘉島の遺跡分布調査をした。しかし、 かつての畑はススキやギンネムが生い茂っ た荒地と化し、周知の遺跡の確認すら困難 である。今回調査できたのは浜貝塚、浜グ スク、比嘉小学校東遺物散布地、比嘉グス ク、浜川洞穴遺跡、ソージガー南西畑地遺 物散布地、クバ島遺物散布地の7遺だけで ある。また、実際に踏査できた遺跡でも表 面採集できる遺物は親指大ほどの小破片数 個程度であり、遺物紹介にもならない。

そこで、今回は、浜比嘉島の考古学研究 の歴史を概観し、その中で遺跡の紹介を行 ないたい。なお、遺跡紹介の番号は一連番 号でまとめた。

浜比嘉島における考古学の調査は、1964 年1月の多和田真淳氏のサーヴェイを嚆矢



多和田氏発見遺跡 (『全国遺跡地図(沖縄)』)

- うしとらの竜門洞窟遺跡
- はちまん洞窟遺跡
- 中の御嶽貝塚
- 大あぶ洞窟隣り洞遺跡
- 三様洞窟遺跡

とする。氏は洞窟を中心に調査され、つぎの7遺跡を発見している。

はちまん洞窟遺跡(プレ縄文) うしとらの竜門洞窟遺跡(後期下半) 中の御嶽貝塚(後期上半) 三様洞窟遺跡(晩期) 大あぶ洞窟遺跡(後期下半)

大あぶ洞窟遺跡の隣り洞窟遺跡(後期 下半)

四柱洞窟遺跡(後期下半)

多和田氏の調査成果は、1968年発行の「全 国遺跡地図(沖縄)」と、1980年発行の「多 和田真淳選集」に掲載されている。各遺跡 についての解説はないが、編年が遺跡名の あとについてる。

## 2 琉球大学歴史研究会の調査

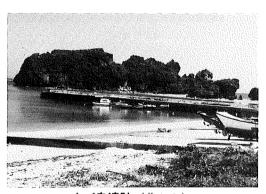
多和田氏のあとに調査を実施したのは、 琉球大学歴史研究会(学生サークル)であ る。1966年4月、浜比嘉島の遺跡分布調査 を実施した同サークルは、「歴史研究」第2 号にその成果を紹介している。

この調査で、多和田氏の発見した遺跡の ほかに、桃原遺物散布地、浜中学校校庭遺 物散布地、浜城東南畑遺物散布地、比嘉小 学校東遺物散布地、クバ島遺跡があらたに 発見された。なお、桃原遺物散布地と浜中 学校校庭遺物散布地は後に命名された浜貝 塚である。琉球大学考古学研究会の調査で もっとも注目されるのはクバ島遺跡の調査 であるので、「歴史研究」から紹介する。

#### ① クバ島遺跡

「兼久部落から海岸沿いに南に約五百米

位行くと、海の中に大きな岩山を見る。琉球石灰岩で出来たこの島は、満潮の時渡れなくなるらしい。この島に登るのは非常に困難を伴う。土地の人の話では、人の住んだあとがあるらしく石垣のくずれた跡があると云う事である。しかし我々の調査ではそれらしきものを確認することは出来ず、クバ島の頂上と西側傾斜面、北側断崖より数百片の土器片を採集する事が出来た。今、その土器片をみるに三採集地とも同じ様相を呈し、薄手で、焼成の良い堅い土器片で、底部は後期独特のくびれ平底である。」



**クバ島遺跡**(北から)

## 3 沖縄県教育委員会文化課の人骨調査

1975年10月25日、「浜中学校体育館建設現場で入骨が発見されたので至急調査してほしい」という電話が県教育委員会文化課に入った。早速筆者と當真嗣一が現場へ行った。そのときの調査経過を當真はつぎのように述べている。

(ア)頭蓋骨は工事の際のブルドーザーでと ばされているが、頭骨を除く各部位は 完全な形で保存されていた。

(イ)人骨の葬り方は、あぐらをかいた姿勢 で両足がくまれている。頭の向きは南 である。

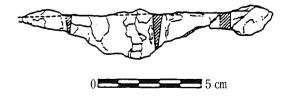
(対遺骸の下位には軽石(約2 cm²) がまば らに敷きつめられていた。

(エ)遺骸の左側腰部から刀子が発見された。 その他の副葬品は見い出されてない。 (オ)人骨を埋葬した際の掘り方は確認され ていない。

ここで特に注目されるのは(エ)である。長さ約12cmの鉄製刀子が腰部で検出されたが、出土状況から腰部に着装していた可能性が強い。刀子は沖縄各地のグスクやグスク相当期の遺跡から検出されているが、現在のところ最も古いのは熱田貝塚第V層出土である。人骨のすぐ近くには浜貝塚があり、また、浜貝塚の東丘陵には浜グスクがある。これらの遺跡と関係ある人骨なのか明らかではないが、今後も発見される可能性があり、注目しておきたい。



浜中学校校庭出土の人骨と共伴の刀子



第2図 人骨と共伴した刀子 (「浜比嘉島の原始・古代を訪ねて」より) ることは、後述する沖縄国際大学考古学研

## 4 沖縄県教育委員会文化課の分布調査

県教育委員会文化課は文化庁の補助を受けて、1975年と1976年の2ヶ年にわたって「沖縄県開発地域埋蔵文化財分布調査」を実施した。そのときに浜比嘉島の遺跡分布調査も実施された。この調査であらたに兼久西丘陵遺物散布地、ミーハンチャーガマ遺跡、比嘉西海岸洞穴遺跡(浜川洞穴)が発見されている。その中で、兼久西丘陵遺物散布地について、次のように述べている。

#### ② 兼久西丘陵遺物散布地

「浜比嘉島の東側兼久の西方丘陵の縁端 および、その岸下斜面一帯に、土器片や石 斧等の散布が見られる。包含層は見られず、 時期もまだ判然としないが、沖縄貝塚時代 中期に属するものかとも考えられる。」

この報告書の中で、多和田氏のいう「中の御嶽貝塚」は「比嘉小学校北方洞穴遺跡(中の御嶽)なり、1979年の全国遺跡地図には「中の御嶽遺跡」と改名されている。なお、「浜貝塚」とあるのは「浜グスク」の誤植である。

# 5 文化庁の『全国遺跡地図(沖縄)』の 刊行

1979年に『全国遺跡地図(沖縄)』が、文化庁文化財保護部から刊行された。実際の調査、執筆等は県教育委員会文化課が行なったものである。このときはじめて「浜貝塚」が登場するが、それは前述したように琉球大学歴史研究会の「桃原遺物散布地」と「浜中学校校庭遺物散布地」のことであることは、後述する沖縄国際大学考古学研

究会の範囲確認調査の結果明らかである。

# 6 勝連村の『勝連村の原始・古代遺跡 を訪ねて』の刊行

1979年、勝連村教育委員会は、勝連村内 の主な遺跡について概説した『勝連村の原 始・古代遺跡を訪ねて』を刊行して、村民 に対して埋蔵文化財の普及に努めている。 その中で、浜貝塚出土の土器や貝製品が実 測図で紹介されている。

7 沖縄県教育委員会文化課のグスク分 布調查

172

1977~1982年まで断続的に3次に亘って 行なわれた「沖縄本島及び周辺離島のグス ク分布調査」の成果が、1983年『ぐすく』 (グスク分布調査報告I)として刊行され た。その中で、浜グスク(イリグスク)と 比嘉グスク(アガリグスク)が紹介されて いる。略図も掲載されているが、略図中に 示されている方位がいずれもずれている。 また、比嘉グスクは長楕円形状であるのに、 円形に図示されている。

# 8 沖縄国際大学考古学研究会の調査 沖縄国際大学考古学研究会(学生サーク

		3 6 7
番号	遺跡名	
万 1		
<u> </u>	浜貝塚	The state of the s
2	浜グスク	13
3	中の御嶽洞穴遺跡	
4	比嘉グスク	
5	ミーハンチャー洞穴遺跡	10-0
6	比嘉小東遺物散布地	
7	浜川洞穴遺跡	
8	ソージガー南西 畑地遺物散布地(仮称)	11 15
9	クバ島遺物散布地	
10	アジェー洞穴遺跡(仮称)	
11	牧場南洞穴遺跡(仮称)	
12	比嘉579-1 石器採集地点	
13	アガリガー付近古銭採集地点	
14	はちまん洞穴遺跡	
15	兼久西丘陵遺物散布地	
16	浜グスク東南畑遺物散布地	0 50100200 300 400 500 m
15 •	16は一今回未調査遺跡	. 0

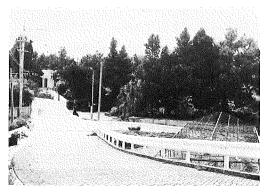
第3回 遺跡分布図(沖縄国際大学考古学研究会作成)

ル)は、1983年9月と12月に「浜比嘉島の遺跡分布調査及び範囲確認調査」を実施し、1984年7月に会報第10号として『浜比嘉島調査報告』を刊行している。ガリ版刷りではあるが、採集遺物についての記述や実測図が付いていて、浜比嘉島の考古学調査報告書として最もまとまったものである。ただ遺跡分布図が略図になっているのが残念である。この報告書を中心にして浜比嘉島の遺跡概要を記す。

#### ③ 浜貝塚

「浜貝塚は、浜部落の南に位置し、同部落の南半分をしめる広範囲な貝塚であり、標高約5mの砂丘上に形成されている。時期は沖縄貝塚時代後期に位置づけられ、さらに後期の貝塚としては典型的なものとして知られている。貝塚の現状は、畑地や道路や民家となっている為攪乱が著しく、地表面に多数の土器片が散布している。その為、保存状態はかなり悪いものと思われる。また、拝所より東へ約50mには、当時、泉(カー)として利用したと思われるメーガー(ウブガー)がある。」

遺物は土器片79点、石器1点、貝製品3



浜貝塚 (東から)

点などである。土器口縁部は有文3点と無文6点で、底部は6点である。底部はすべてくびれ平底である。しかし、勝連町教育委員会の緊急発掘調査では第4・5図に示しているとおり尖底土器が検出されている。 貝製品はメンガイの有孔製品2点とヒメジャコの有孔製品1点である。

#### ④ 浜グスク

「浜部落の東南側約150m、標高約60mの石灰岩丘陵地の先端部に位置する。遺跡の現状は東南両側の一角に野面積みの石垣が認められるが、崩壊が著しく保存状態は極めて悪い。今回の採集では同グスクの東南



**浜グスク**(西から)



**浜グスクの野面積み石垣**(東から)

側の道路沿、及び畑地で遺物が採集された。」

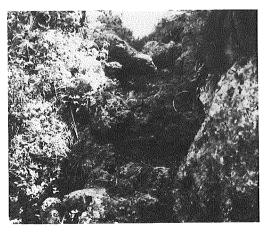
採集された遺物は土器31点、陶器1点、 須恵器1点である。土器は口縁外面に平面 観が長楕円形のコブを貼付する滑石製石鍋 模倣土器も採集されている。この土器には 滑石細片が混入されているようである。

#### ⑤ 中の御嶽洞穴遺跡

「比嘉小学校の北側約130m、標高約60mにあり、百平方メートル位の鍋の底のような凹地に形成されている。地質はマージで、時期は沖縄貝塚時代前期~中期に相当する。」(多和田氏の「中の御嶽貝塚」と思われる)



**比嘉グスク**(北から)



比嘉グスクの入口(北から)

採集遺物は土器片16点で、その中に肥厚口縁の宇佐式土器が含まれているようである。

#### ⑥ 比嘉グスク

「別名アガリ(東)グスクとも呼ばれ、 比嘉部落の旧公民館から南西方向へ約80m、 標高44.2mの丘陵上に形成されている。グ スクの周囲は断崖となり自然の要塞的なと ころに占地している。グスクの北側には城 門らしきところがあって、グスク内への出 入口となっている。この出入口をはさんで 左右に野面積みの石垣がめぐっている。」

遺物は青磁外反碗が2点採集されている。 1点は無文外反碗だが、あと1点は「数本 の沈線が施されている」とあることから、 弦文碗と考えられる。

## ⑦ ミーハンチャー洞穴遺跡

「比嘉小学校の西方約150m、標高約65m に位置し、琉球石灰岩で形成された小崖に立地し、遺跡の周辺はギンネムがおい茂っている。洞穴の入口は南側を向いており、間口の直径約5 m、奥行約10mの横穴小洞穴である。沖縄貝塚時代後期終末に属するものだと考えられる。洞穴の内部と外部で遺物が採集できた。」

採集遺物は土器片36点、リュウキュウサルボウとヒメジャコの有孔製品などである。 土器の底部は2点ともくびれ平底である。 口縁部はすべて無文で、胴部には貝殻条痕が顕著に残っているのがある。

### ⑧ 比嘉小学校東遺物散布地

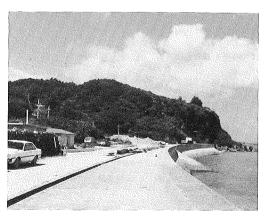
「比嘉小学校より東側約75m、標高約40m の石灰岩崖下に立地し、地質は島尻マージ である。時期は沖縄貝塚時代後期終末にあたり、採集された土器は、後期からグスク 初頭のものと思われる。」

採集された遺物は土器片50点、すり石1 点である。土器の口縁と底部(平底)から みて、グスク系の壺形土器と考えられる。

#### ⑨ 浜川洞穴遺跡

「旧比嘉公民館より北西約140m、標高約12mの海岸沿いに位置する。洞穴入口の高さ約4m、横幅約3m、奥行推定約40mあると思われる。沖縄貝塚時代後期後半の遺跡で、入口付近で土器が多く採集される。近くにはハマガー(ウブガー)があり、当時の人々はそこの水を利用していたと思われる。現在このカーは拝所として祀られている。」

採集遺物は土器片39点で、壺形、碗形、 鉢形などの器形が見られる。底部は平底が 2点報告されている。



浜川洞穴遺跡(東から)

#### ⑩ ソージガー南西畑地遺物散布地

「同散布地は、今回新しく発見された遺跡で、南海岸からの最短距離約175m 地点の

兼久ソージガーより、兼久部落へ至る道の西側畑地一帯(崎原)にまで、その範囲は広がり、全長約930mにもおよぶ。標高約4~5mの平地に立地しており、地質は砂まじりの島尻マージである。現在は放地状態の荒地であったり、畑として利用されている。採集された遺物より、時期は、後期~グスクになると思われる。

採集された遺物は土器片が10点だけで、 特徴のある口縁部、底部もないので時期に ついては明確ではない。今回の調査でもほ とんど表面採集ができなかった。



ソージガー南西畑地遺物散布地 (比嘉グスクより望む)(北から)

#### ① 牧場南洞穴遺跡

「浜部落の南方約500mにある牧場をさらに南へ約250mほどいった標高約50mの石灰岩丘陵地中腹にある洞穴内に形成される。同洞穴は北向きに開き、長径が約15mの楕円形を呈している。また、洞穴の奥行きは約60~70mである。遺物が洞穴入口から約15m地点にある15畳程度の平坦部に集中して散布していることから、この平坦地が遺跡の中心である可能性が強い。なお、遺物

はグスク系土器片、魚骨、ウニ数点を採集 することができた。

遺物は土器片が29点採集されている。口 縁部と底部を見ると、浅鉢(鍋形)形のグ スク土器で、おそらく縦耳の付く土器と考 えられる。

### II 勝連町教育委員会の浜貝塚調査

浜貝塚内を通る道路及び側溝工事にかかる緊急発掘調査が、1987年と1988年に実施された。これは1978年に側溝工事で一部破壊されたのを受けて実施された緊急発掘調査である。第4図と第5図の遺物は1978年の側溝工事で破壊されたときに採集されたものである。

#### おわりに

以上概観したように、浜比嘉島の考古学研究は浜貝塚の発掘調査以外すべて表面調査であり、多和田真淳氏、琉球大学考古学研究会、沖縄国際大学考古学研究会の調査以来あまり進展していない。また、多和田氏が発見した「うしとらの竜門洞窟遺跡」

「三様洞窟遺跡」「大あぶ洞窟遺跡」「大あぶ洞窟遺跡の隣り洞窟遺跡」「四柱洞窟遺跡」はその後誰も調査していない。現在それを調べようとすると、「そのような洞窟は知らない」という。26年の歳月は長く、古い呼び名の洞窟名も忘れられている。

浜比嘉島は洞穴遺跡が多いのが特徴である。洞穴遺跡から出土する遺物はほとんど グスク系の土器であり、その時期に洞穴が かなり利用されたようである。

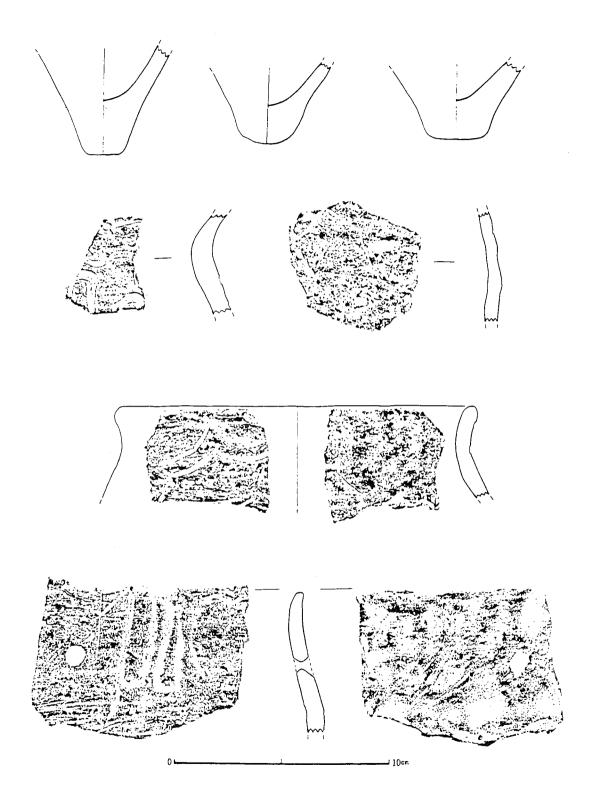
編年を考えると、伊波、荻堂、大山式など沖縄貝塚時代前期の遺跡は現在のところ発見されてなく、中の御嶽貝塚や兼久西丘陵遺物散布地など沖縄貝塚時代中期の遺跡が最も古い遺跡である。そのあと浜貝塚などの沖縄貝塚時代後期へと続き、さらに洞穴遺跡・グスクへと続いている。

グスクは浜グスクと比嘉グスクがあるが、いずれも野面積みの石垣をもつグスクである。採集された中国陶磁器で見ると、14~15世紀のグスクと考えられる。

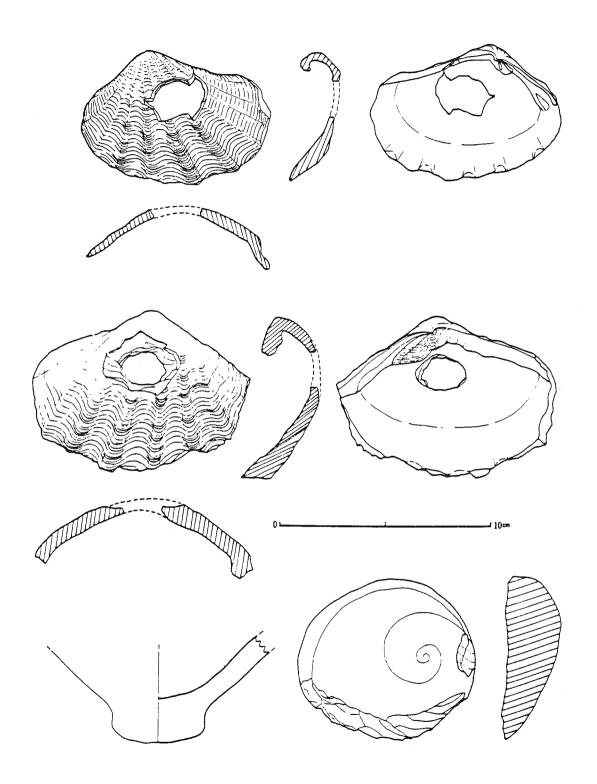
最後に写真の現像・焼付、遺物の実測・ トレース等で協力を得た島袋洋、金城亀信、 高良美千代の諸氏に謝意を表する。

#### 注

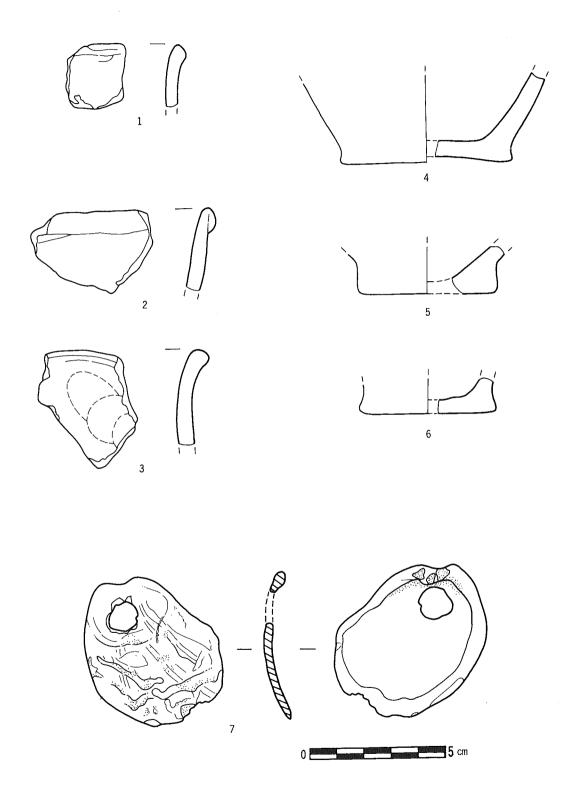
- 1 『全国遺跡地図(沖縄)』 国土地理協会 1968
- 2 多和田真淳『多和田真淳選集』 古稀記念多和田真淳選 集刊行会 1980
- 3 『歴史研究』第2号 琉球大学歴史研究会 1966
- 4 當真嗣一『勝連村の原始・古代を訪ねて』 勝連村教育 委員会 1979
- 5 金武正紀『熱田貝塚発掘調査ニュース』沖縄県教育委員 会 1978
- 6 『沖縄県の遺跡分布』 沖縄県教育委員会 1977
- 7 『全国遺跡地図(沖縄県)』 文化庁文化財保護部 1979
- 8 『ぐすく』(グスク分布調査報告 I ) 沖縄県教育委員会 1983
- 9 『浜比嘉島調査報告』会報第10号 沖縄国際大学考古学 研究会 1984



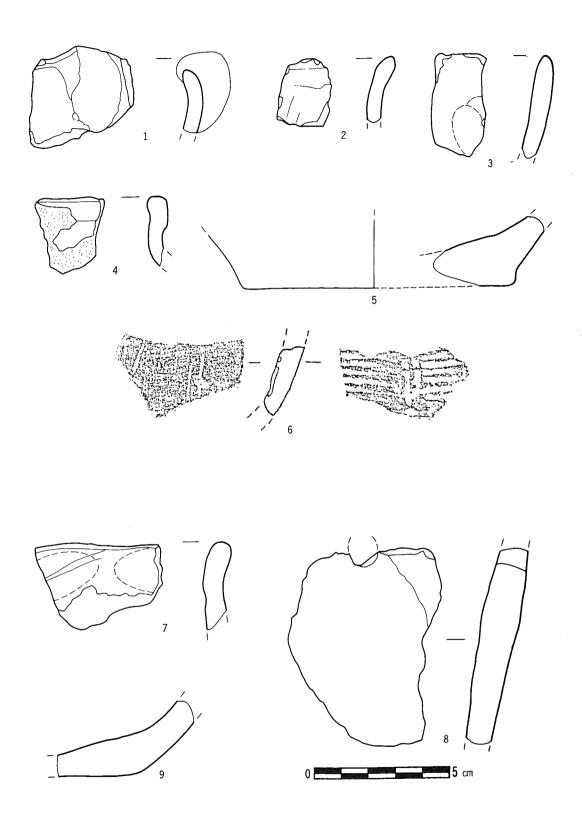
第4図 浜貝塚出土の土器 (「浜比嘉島の原始・古代を訪ねて」より)



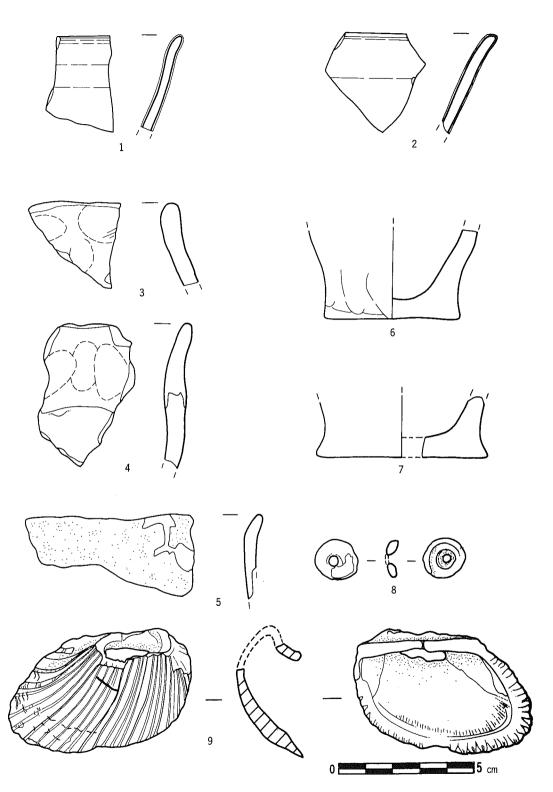
第5図 浜貝塚出土の貝製品と土器底部 (「浜比嘉島の原始・古代を訪ねて」より)



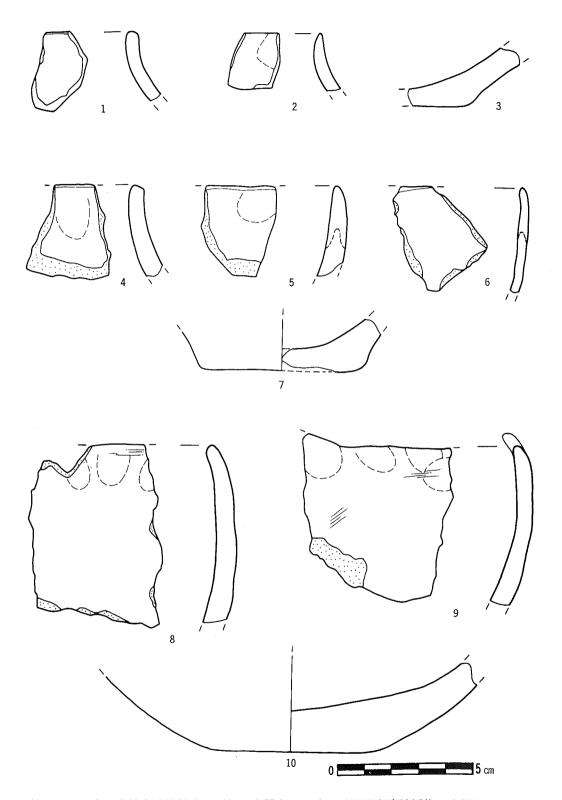
第6図 浜貝塚採集の土器 (1~6), 貝製品 (7) 〔沖縄国際大学考古学研究会蔵〕



第7図 浜グスク採集の土器  $(1 \sim 5)$ , 須恵器 (6), 中の御嶽洞穴遺跡採集の土器  $(7 \sim 9)$  〔沖縄国際大学考古学研究会蔵〕



第8図 比嘉グスク採集の青磁碗  $(1\cdot 2)$ , ミーハンチャー洞穴遺跡採集の土器  $(3\sim 7)$ , 貝製品  $(8\cdot 9)$  [沖縄国際大学考古学研究会蔵]



第9図 比嘉小学校東遺物散布地採集の土器 $(1 \sim 3)$ , 浜川洞穴遺跡採集の土器 $(4 \sim 7)$ , 牧場 南洞穴遺跡採集の土器 $(8 \sim 10)$  [沖縄国際大学考古学研究会蔵]